一五世紀後半ロシアの対タタール外交

中村仁志

一

ロシアの歴史は、多民族国家形成の歴史である。一六世紀以来、ロシア国家の支配下に組み入れられてきた民族の数は枚挙にいとまがなく、そのリストはヴォルガ流域のタタール人、チュヴァシ人、モルドヴァ人、ウドムルト人、バルト海沿岸のリトアニア人、ラトヴィア人、エストニア人、カフカースのグルジア人、アルメニア人、チェチェン人、オセット人、中央アジアのウズベク人、タジク人、トルクメン人、キルギス人、シベリア・極東のブリャート人、ヤクート人、ネネツ人等々とはてしもなくつづく。それら諸民族のなかでひときわ異彩を放つのがタタール人であろう。

そもそもタタール人とは何者か。ロシアにおける「タタール人」の語の意味はかなりあいまいであり、広くはアジア系諸民族一般の総称としてさえ使われてきた。が、歴史的にはキプチャク汗国を築いたモンゴル人とその支配下にはいってこれと混淆したテュルク系の遊牧民とその子孫をさす。彼らキプチャク汗国のタタール人は、一三世紀のはじめより二世紀半の長きにわたってルーシの諸公国を支配し、ロシア人のうえに重苦しい枷となってのしかかりつづけた（「タタールのくびき」）。だが、強盛を誇ったキプチャク汗国も一五世紀になると解体の道をたどり、その後継者として誕生した大オルダ、ノガイ・オルダ、カザン汗国、クリミヤ汗国、アストラハン汗国などのタタール諸国[1]は、一六世紀半ばから一八世紀にかけあいついでロシアのツァーリの支配下にはいっていく。

すなわち、一度はロシア人を従属させたタタール人は、後には逆にロシア国家の支配に服する身となったのだ。ロシア人と非ロシア人の間の数ある交渉のなかでも特筆に値するケースである。このような特異な経過をたどったロシア＝タタール関係における決定的な転機は、一五世紀の後半に訪れる。有名な一四八〇年の「ウグラの対陣」によってすでに有名無

実化しつつあった「タタールのくびき」は終止符を打ち、ロシアに対するタタールのヘゲモニーが解消したのである。が、その一方、ロシア国家はいまだタタール諸国の征服、併合にのりだすまでにはいたらない。つまり、一五世紀後半は、ロシアとタタールの力関係がタタールの優位からその逆へと転ずる過程で、一時的に両者の力の均衡が成立した時期にほかならない。それゆえ、これはまた、ロシアとタタールとが実力的に対等な立場で交渉しえた史上稀な時代でもあった（ほぼ同様のことが当時ロシアの西方の隣人であったリトアニア大公国との関係についても言いうる）。

ソ連の崩壊にともない、かつてのソ連領に成立した国々の住民がそれぞれたどるべき道を模索しつつある現在、緊急に解決をせまられている重要課題の一つに民族問題があるのにかんがみれば、上に述べたようなロシア＝タタール関係研究の今日的な意義は、あまりに明らかであろう。とくに民族問題の焦点の一つであるロシア人と非ロシア諸民族との関係の見直しをはかるうえで、かつて対等の立場にあった時期のロシア人とタタール人の関係の推移の解明は多大の重要性をもっている[3]。

本稿では、こうした問題意識を念頭に、一五世紀後半のロシア＝タタール関係をふりかえる。その際、まずはじめに両者の関係が形成されるうえでの地理上の制約について一言断っておかねばならない。かつてのキプチャク汗国の版図からするとモスクワを中心としたロシアは北西にはなはだしく偏した位置にあった。このため、キプチャク汗国の旧領に成立したタタール諸国のなかでもヴォルガ＝ヤイーク河間に遊牧した東方のノガイ・オルダやヴォルガ河口部を占めた南方のアストラハン汗国は、地理的にロシアから遠く隔たり、直接のコンタクトはとりがたい状況にあった。いきおい、両者とロシア国家とのつながりも希薄なものとならざるをえない。これに対し、ロシアの国境地帯に近接し、和戦いずれにせよモスクワと頻繁な交渉をもったのが大オルダ、カザン汗国、クリミヤ汗国である。そのなかでも、ロシアとの外交的な紐帯がとくに強かったカザン汗国、クリミヤ汗国に焦点をあて一五世紀後半のロシア＝タタール関係をふりかえるとしたい。

二

一五世紀後半のロシアは、諸公国の分立という政治的分裂を克服し、統一国家形成にむけて歩をすすめつつあった。その中心となったのが、二人の大公、ヴァシーリー二世（在位一四二五―六二年）、イヴァン三世（在位一四六二―一五〇五年）父子の治下のモスクワである。

キプチャク汗国の数ある継承国家のなかで、このモスクワ

と最初に本格的な交渉をもったのはカザン汗国であり、それはつとに一四三〇年代にまでさかのぼる。このため、初期のモスクワ＝カザン関係には過渡期特有の性格が色濃くあらわれている。すなわち、一方でキプチャク汗国時代以来のロシア＝タタール関係の伝統を踏襲しながら、他方では従来見られなかったような現象も姿をのぞかせだしているのである。

そこでモスクワとカザンとの関係を論ずるにあたり、前提としてまずロシア＝タタール関係の伝統的なパターンについてまとめおくと、それは以下のごとく約言できるであろう。キプチャク汗は、ロシアの諸公のなかから誰が第一人者たる大公となるかを認定する。バスカクなる役人を派遣して、あるいは大公を通じてロシアより貢税をとりたてる。かわりにロシアの方では、それもとくに興隆期のモスクワ君主に顕著であった事象としてタタールの軍勢の助けを借りてライバルの公を討ち、大公の支配権を強化する、と。[3]

モスクワとカザンの関係は、こうしたキプチャク汗国時代以来の伝統をひきずって、と言うかまさにその延長線上に位置するものとしてはじまった。そもそもカザン汗国の創始者ウルー＝ムハメッド自身にしてからが、キプチャク汗の位に就いていた一時期があり、その間、汗の資格においてロシアの大公位の裁定者役をつとめたことすらあったのだ。一四三二年に大公位をめぐる骨肉の争いにおいて決着を請うべく伺候してきたヴァシーリー二世とその伯父ユーリーを前にしてヴァシーリーに大公の位を与えたのは、ウルー＝ムハメッド汗その人にほかならない。

その後、ウルー＝ムハメッドは一四三七年内訌に敗れてキプチャク汗の地位を追われ、逃れた先のヴォルガ・ブルガールの地であらたな遊牧国家を築いた。タタール国家としてのカザン汗国の成立であり、ここに狭義のモスクワ＝カザン関係が端緒を開く。だが、両者の間柄は、はじめは友好的なものではなかった。敗残の身となったかつての宗主ウルー＝ムハメッドをみくびってかヴァシーリー二世はこれと戦端を開き、手痛い目にあう。一四三八年モスクワ軍はベリョーフの戦いにおいて敗北、翌年夏には、ウルー＝ムハメッドのタタール軍がモスクワの城壁の下にせまった。さらに四五年スーズダリの戦いにおいてモスクワ側はまたしてもカザン軍に敗れ、こたびはヴァシーリー二世までが捕虜とされてしまう。[4]勝者ウルー＝ムハメッドは、ヴァシーリー二世釈放の代償として身の代金の支払いを要求するとともに、息子たちをロシアの諸都市に派遣して貢税の取り立てをはかった。これは、バジレーヴィチによってバスカク制の復活に擬されたごとく往時[5]のロシア＝タタール関係の再現を思わせる措置であった。

一方、ヴァシーリー二世の方は釈放された後にも悲運がつづき、かつて大公位をめぐって争った伯父ユーリーの息子シ

エミャーカに敗れ、大公位も奪われた。だが、その後勢力を盛り返し、ロシアに派遣されてきていたウルー＝ムハメッドの息子たちの助力も得て、シェミャーカとの争いに勝利を収めた。このあたりのなりゆきは、タタールの軍勢の力を借りてライバルの公を討った往時のモスクワ君主の姿をほうふつとさせよう。

という具合に、モスクワとカザンの初期の交渉においては随所でキプチャク汗国時代のロシア＝タタール関係のパターンが踏襲された。その一方、新しい関係のありようもそろそろ萌芽をのぞかせだす。

一三世紀前半バトゥーの建てたキプチャク汗国がロシアに対する支配権を握りえた背景の一つとしては、諸公国が分立して互いに張り合うというロシアの政治的分裂があった。が、一五世紀になるとロシアとタタールの立場は逆転、ロシアがモスクワを中心に統一国家形成の道をたどったのと対照的に、キプチャク汗国はいくつものタタール国家に分裂していった。

本章の主題となっているカザン汗国自体、そうしたタタール勢力の分裂の結果として生じたのであり、そのうえ一四四五年にはさらなる分裂の危機がこの国を襲う。ことは同年カザン汗国で勃発したクーデターにはじまった。ウルー＝ムハメッドの長子マフムーテクが父を排し、自身がカザンの汗位に登ったのである。[6] この挙に対しマフムーテクの弟のカシムとヤクブが激しく反発、両者は翌四六年ロシアへ去って、ヴァシーリー二世に仕えるようになった。カシムは、その後オカ河畔に自分の名にちなんでカシモフと呼ばれるようになった一市を得、ここを拠点とするタタール人の汗国を築いた。カザン汗家の分裂を契機とする新たなタタール勢力カシモフ汗国の誕生である。

ヴェルナツキーは、かくしてチンギス汗の血を引くタタール皇子を頭に戴くモスクワの従属国が成立したことの画期的意義を説く。これを機にタタール勢力によるロシア支配が終止符を打ち、かわって森林勢力ロシアの遊牧民に対する反撃、ステップへの膨張がはじまるのだ、と。[7]

カシムのタタール部隊は、モスクワ軍の一員として縦横の活躍を見せ、ヴァシーリー二世の仇敵シェミャーカを痛めつけた。シェミャーカがヴァシーリー二世をさして、度はずれてタタールを愛したと毒づいたゆえんである。また、一四四六年西方のリトアニア大公国との戦いにおもむいたタタール皇子もカシムとヤクブであったともくされている。[8]

が、このような働きにもましてカシムがはたした役割のなかで第一にあげるべきは、南部方面の防衛者としてのそれであったろう。ロシアの南方は、一四四九年以降たびたび大オルダのタタール人の襲撃にさらされていた。[9] カシムはこれを迎撃する役目を担ったのであり、それゆえにこそ、彼の汗国は

モスクワの南方を流れ対タタール防衛線として重大な意義をもっていたオカ河の河畔に配置されたのである。ここに我々は、ロシア＝タタール関係における新たな局面の展開を見る。モスクワは、いまやタタール人をもってタタール人を制するようになったのだ。

と同時に、モスクワにとってカシムは、単なる軍事力にとどまらない貴重な価値をもっていた。チンギス汗の子孫、それもカザン汗国の始祖ウルー＝ムハメッドの息子という血統が、それである。ここから、カシムは、将来のカザン汗位への有力な候補、奇貨としてロシアにとどめおかれることとなる。そして、その計が現実のものになりかけたのが、カザン汗マフムーテクの死後の一四六七年。同年、カザン汗国内のカシム支持派が彼のもとへ使者をつかわし汗位に就くよう請うたのに応じたカシムは、モスクワ軍とともにカザンへと向かった。だが、結局、カシムはカザンの汗位に登ることなく終わる。カザンへの途上、すでに新汗として即位していたイブラヒム（マフムーテクの子、カシムの甥）に行く手を阻まれ、むなしく引きかえさなければならなかったのである。[10]

かくして、自身の影響下にあるタタール皇子を支援してカザン汗位に就けようとするモスクワの最初の試みは、失敗に終わった。だが、この企てはいつの日か実現のはこびとなるであろう。だが、話をそこまですすめる前に、一五世紀後半カザン汗国とならんでモスクワと深いつながりをもったもう一つのタタール勢力であるクリミヤ汗国の動向についても目を向けておかねばならない。

三

モスクワ国家のカザン汗国、クリミヤ汗国それぞれとの関係を論じていく際に、留意すべき点は何か。それは、モスクワ＝カザン関係の場合には、かなりの程度まで二国間の、あるいはカシモフ汗国をも含めた当事者間だけの問題にしぼって考察をすすめえたのに対し、モスクワ＝クリミヤ関係については、より広い国際関係の文脈においてみなければならない、という点である。およそ外交を論じるにあたっては、当事者のみならず関連する近隣勢力全般にも目を配る必要があるのはわざわざ断るまでもないことながら、モスクワ＝クリミヤ関係についてはとりわけ国際環境に左右されるところ大との感が強い。

モスクワ、クリミヤ汗国をとりまき両国の関係に影響をおよぼした諸勢力のなかでもっとも重要なものとしては、リトアニアと大オルダの名があげられる。一五世紀後半のモスクワ、クリミヤ、リトアニア、大オルダの四者の間柄は非常に錯綜し、かつ結びかつ離れをくりかえすのであるが、そのな

かにもいく筋かの基本となる関係が見いだしうる。その一つがモスクワとリトアニアの対立である。元来がバルト海沿岸の小国であったリトアニアは、ロシアが「タタールのくびき」に服している間に南東方面にむけて領土を大きく拡張、大公ヴィタウタス（在位一三九二―一四三〇年）のころにはロシア西部の諸公領の大半を支配下におさめるまでになった。このリトアニアの勢力拡張に対し、ロシアの新しい中心としてかつてのロシア諸公領全体を再び統合すべく拡大をつづけるモスクワとの対決は、避けられないものであった。

リトアニア以外にもう一つモスクワにとって大きな脅威となったのが、大オルダである。大オルダは、キプチャク汗国の数ある継承国家のうちでも汗国の直接の後継者をもって認じており、それがために二つの目標の達成をめざしていた。その一つは、ロシアを再び、服属させ貢税者となすこと。大オルダのタタール人は、一四四九年以来、五〇、五一、五五、五九、六〇年とひっきりなしにロシアを襲うようになった。こうしたしつような襲撃については、襲撃は単なる掠奪品や捕虜の獲得目当てでおこなわれたのではなく、より重要な政治的目的を蔵していたと考えられるとの評がある。[11] すなわち、タタールによるロシア支配の復活である。

また、大オルダの汗は、かつてのキプチャク汗がタタール勢力の長であったごとく、他の継承国家を自己の威令に服さしめようとした。が、自立を目指す継承国家の君主たちが、唯唯諾諾とこれに応じるはずもない。わけてもクリミヤ汗国の始祖ハジー＝ギレイは、大オルダと真っ向うから対決、衝突をくりかえした。

という具合にモスクワとクリミヤがともに大オルダと敵対していた以上、両国が共同して大オルダにあたるべく同盟を結ぶのは自然な成り行きであったかのように思われる。はたして、一四六四年には、ロシアを襲撃すべくドン地方にまで進出してきた大オルダの汗アフマートの軍勢をクリミヤ汗ハジー＝ギレイが攻撃し、それによって大オルダのロシア侵寇の試みが頓挫するという一幕さえ見られたのである。[12]

だが、こうしたエピソードにもかかわらず、一四六〇年代には、クリミヤ汗国はいまだロシアと本格的な同盟を結ぶまでにはいたらない。ハジー＝ギレイは、そもそもクリミヤの汗位に就くにあたりリトアニアの後援を受けたといういきさつがあり、彼の時代にはクリミヤはリトアニアの友邦でありつづけた。事態が変化するのは、一四六六年のハジー＝ギレイの死後、汗位継承をめぐる内乱がもちあがって以降である。

ハジー＝ギレイの二人の息子、ヌル＝デウレットとメングリ＝ギレイの間の争いを軸とするクリミヤの内乱は、二転三転をくりかえしながら一二年の長きにわたってつづき、一四七八年オスマン＝トルコの支援を得たメングリ＝ギレイが汗

位を確保するにおよんでようやく終息にむかった。この間、クリミヤに対する宗主権を唱えて汗位争いに介入したのが大オルダのアフマート汗であり、七六年にはメングリ＝ギレイを追って自分の縁者のゼネベクをクリミヤの汗位にすえることすらした（一説には汗位にはヌル＝デウレットを座らせ、ゼネベクを目付役とした）[13]。

このため、七八年に汗位への復位をとげたメングリ＝ギレイが大オルダを憎み、恐れることはなはだしく、対アフマート戦略が彼の政策の第一の柱となった。ここにおいてにわかに現実身をおびて浮かびあがってくるにいたったのが、大オルダの圧力に苦しんでいたもう一つの勢力であるモスクワとの同盟の可能性である。もちろん、モスクワとの攻守同盟の締結は、同時にモスクワの敵対者であったリトアニアとの決別を意味するのであるが、メングリ＝ギレイはあえてこれに踏み切った。その結果、リトアニアの方は対抗上大オルダと結び、ここにモスクワ＝クリミヤ連合対リトアニア＝大オルダ連合という二大同盟の対峙の図式ができあがった。これが、さっそくに実際の作戦行動のうえで効を奏したのが有名な「ウグラの対陣」である。

一四八〇年、ロシアにむかって兵をすすめてきた大オルダのアフマート汗は、一〇月八日ウグラ河の河畔に達し、ここでイヴァン三世のロシア軍がすでに対岸に陣をはっているのを発見、河をはさんでにらみあう形となった。その間、アフマートに加勢すべくリトアニア軍が東進してきたが、これはモスクワの同盟者メングリ＝ギレイに牽制され結局ウグラ河畔にはたどりつけずに終わる。このため、アフマートはリトアニア軍の参着がないまま渡河して戦端を開くふんぎりがつかず、むなしく対陣をつづけたあげく、ついに一一月一一日、撤退を開始するにいたる。これが、「タタールのくびき」に終止符を打った出来事として史上名高い「ウグラの対陣」である。

事件そのものとしては泰山鳴動して鼠一匹の感が否めないが、要は来襲してきたタタール勢の前に敢然と立ちはだかったイヴァン三世のロシア軍に対しアフマートがどうにも手だしができなかった、という点にタタール支配の終りを画する意義が求められるのであろう。が、それよりも本当の波乱が生じたのは、むしろアフマート汗の撤退後の方である。年が改まったばかりの八一年一月六日、アフマートはシベリア汗とノガイ・タタールの急襲を受け、敗死した。ウグラ河畔からの撤退もものかは、この椿事こそが大オルダにとって真に手痛いダメージであった。

しかし、この惨事にもかかわらず大オルダは、アフマート汗の遺児たちを戴いて生き残った。それゆえ、「ウグラの対陣」の後も、大オルダの脅威、タタールによるロシア支配復

活の懸念はまったく消え去ったわけではなかった。この点、モスクワにとり、幸いかつ何よりの頼りとなったのは、大オルダに対し徹底的な戦いを挑んだクリミヤ汗メングリ＝ギレイの存在であった。メングリ＝ギレイは、一四八六―九一年にかけてアフマートの息子たちとの五年戦争を戦って勝ち、ついに一五〇二年大オルダを敗亡に追いこんだのである。[14]

バジレーヴィチやカルガーロフは、こうしたタタール間の争いがモスクワ国家に貴重な息つぎの時間を与えた旨、指摘する。南東方面からする大オルダの圧力が弱まった間隙を利して、モスクワは西部方面に進出する機会をつかんだ。「タタールのくびき」時代にリトアニア領となっていた西部の諸都市をつぎつぎと奪取していったのだ。[15]

クリミヤ汗国との同盟が、モスクワにとりかくも重要な意義をもっていたのにかんがみれば、モスクワがこの関係の維持にやっきとなったのもけだし当然と言わなければならない。クリミヤに対して礼を失せぬよう、汗の機嫌を損ねぬよう、ロシア側は痛々しいばかりの心配りを示す。イヴァン三世時代のモスクワとクリミヤ汗国との間で交わされた外交文書の様式、使者を迎えるにあたっての典礼等を分析したクロスキーは、それらの多くがかつてのモスクワとキプチャク汗国との関係をほうふつとさせるものであった、という。[16] すなわち、形式的にはモスクワ君主のクリミヤ汗への臣従である。

ここに一種のパラドックスが認められよう。大オルダは、キプチャク汗国の実質的な後継者たるべくロシアに対する「タタールのくびき」の再建をめざした。この試みを打ち砕くため、モスクワはクリミヤとの同盟を不可欠とし、同盟維持のためにはあえて形式上自らをクリミヤ版「タタールのくびき」につなぐことすら辞さなかったのである。

四

前二章で見てきたごとく、一五世紀後半のモスクワ外交はカザン汗国、クリミヤ汗国それぞれに対してあい異なる施策をとってきた。カザン汗国を相手にした場合には、汗家の一員を庇護してかいらい汗の擁立を図り、クリミヤ汗国に対しては同盟策をもって臨んだのである。この二つの路線は、一四八〇年代半ばになるとより強化されるとともに互いに不可分のかたちで結びつくようになっていく。

まず、カザン汗国について。モスクワのカザン汗位継承への介入の最初の試みは、つとに一四六七年にまでさかのぼる(五頁参照)。この時は、失敗に終わったものの、八〇年代にはいると介入の動きは再び活発となり、このたびは実際にモスクワがカザン汗位を左右するしだいとなる。

一四七九年カザン汗イブラヒムが死亡した後、後継候補と

して母親の違う二人の遺児が立った。一人はイブラヒムがファーティマとの間にもうけたアレガム（アリーハン）。そしてもう一人がヌル＝サルタンを母とするムハメッド＝エミンである。異母兄弟の間の汗位争いは、モスクワの介入をうけて二転三転めまぐるしい展開を見せた。最初に父の跡を襲ったのはアレガムであったが、一四八四年モスクワの軍勢がカザンを攻め、ムハメッド＝エミンを汗位にすえる。が、翌八五年同じモスクワの手でアレガムが復位させられた。と見るや八六年ムハメッド＝エミンが返り咲き、さらにまた同年のうちにアレガムが三度目の登玉をはたす。[17]

と文字通り猫の目のように変る汗位交代劇のあわただしさであった。これはカザン人にとって迷惑であったのはもちろん、事態をかく推移させた責任の半ば以上を負うべきモスクワにとっても必ずしも歓迎すべき状況ではなかった。こうもめまぐるしく汗が代わって（否、代えて）ばかりいては、カザンとの間に安定した関係を打ち立てられようはずがない。それゆえ、いずれはモスクワも、アレガム、ムハメッド＝エミンのどちらを押すか態度を決せねばならなかった。

この問題に解決の糸口を与えたのが、モスクワとクリミヤ汗国との関係であり、ここに一人の女性が狂言まわしとして登場してくる。亡きカザン汗イブラヒムの妻ヌル＝サルタンが、その人である。ヌル＝サルタンは、元来がノガイ・オルダの中心であったマンギィト部族の出身であった。彼女の父テミールはノガイの始祖エディゲイの孫にあたり、当時ノガイの有力者であったムーサやヤムグルチェイ[18]とは従兄弟の間柄にあった。このヌル＝サルタンが、夫の死後クリミヤのメングリ＝ギレイと再婚したのである。となれば、彼女の子ムハメッド＝エミンは、モスクワの同盟者たるクリミヤ汗の義理の息子になったわけである。

はたして一四八七年はじめヌル＝サルタンの再婚を知ったモスクワは、この時より決定的なムハメッド＝エミン支持に傾くようになる。同年五月モスクワ軍はカザンに遠征して三週間の包囲のすえアレガムを降し、ムハメッド＝エミンを汗位にすえた。これが異母兄弟の間の汗位争いの決着となり、以後アレガムがムハメッド＝エミンにとって代わることは二度となかったのである。

ムハメッド＝エミンは、その後一四九六年から一五〇二年にかけての中断期を除き、一五一八年に死亡するまでカザンに君臨しつづけた。が、この中断期においてさえ、ほとんどの期間モスクワの後押しをうけつつカザンの汗位にあったのは、ムハメッド＝エミンと同じくイブラヒムとヌル＝サルタンを父母とする弟のアブドゥル＝ラーティフであった。つまり、クリミヤ汗の義理の息子がモスクワの手によりカザンの汗位にすえられるという構図そのものには変わりはなかった

のだ。

モスクワのイヴァン三世は、カザンにかいらいの汗をたてるのに成功した。いったん自己の庇護のもとにおいたタタール皇子を汗位にすえて間接的な支配力を行使する。この方法の有効性にかんがみれば、これが他のタタール勢力相手に適用されたとしても不思議ではないだろう。実際、それは同盟相手であったクリミヤ汗国に対してすらおこなわれる兆しが見られたのである。

先に述べたようにクリミヤ汗国にあっては、一四六六年始祖ハジー＝ギレイが没して以来七八年までメングリ＝ギレイとヌル＝デウレットの兄弟を中心とする骨肉の後継者争いがつづいた。その間、一時は汗位に就いたヌル＝デウレットは、結局は敗れてクリミヤを去るはめとなった。その後ロシアのイヴァン三世のもとに身をよせたヌル＝デウレットは、一四八六年ごろかつてカザン汗家の一員であったカシムが領していた辺境の都市カシモフを与えられた。[19] クリミヤ汗メングリ＝ギレイにとり、この兄の存在はまことに気がかりであって、八七年彼をクリミヤにもどすようイヴァン三世に申し入れたが、いんぎんな断りにあう。[20]

かくしてモスクワは、血統上メングリ＝ギレイと同程度にクリミヤ汗位に就くべき正統性を主張しうる人物ヌル＝デウレットを手中にした。兄弟のうち、仮にメングリ＝ギレイが先に死亡したとすればである。その時にはヌル＝デウレットが汗位に返り咲く可能性も十分にあったであろう。だが、実際には先に世を去ったのはヌル＝デウレットの方であって（一四九八年ごろ）、[21] メングリ＝ギレイは一五一五年に死亡するまでクリミヤの汗位を保持した。そして、カザンのムハメッド＝エミン、アブドゥル＝ラーティフ兄弟のケースとは違い、モスクワはヌル＝デウレット、メングリ＝ギレイ兄弟がともに存命しているうちは、あえて両者の間でのクリミヤ汗位の交替を策そうとはしなかった。

これは言うまでもなく、大オルダと戦っている同盟者メングリ＝ギレイの権力をぐらつかせるのは、モスクワにとって得策ではなかったためであろう。だが、それならば、なぜ、モスクワはヌル＝デウレットを掌中に握りつづけたのか。メングリ＝ギレイ汗にとって目障りなはずのヌル＝デウレットを擁したままでいるのは、汗と良好な関係を保っていくうえでは、明らかにマイナスの材料である。にもかかわらず、モスクワがヌル＝デウレットを手もとにとどめおいたのは、それが結局のところクリミヤとの同盟を維持するうえで資するところのある方策と考えられたからであろう。

と考察をすすめると、ヌル＝デウレットの存在がメングリ＝ギレイにとりある種のプレッシャーとして働いたであろうとの推察にいきつく。もし仮に、メングリ＝ギレイがモスク

ワとの同盟を破棄し、敵方にまわったとすればである。その時には当然、イヴァン三世は、ヌル＝デウレットという格好の切り札を武器にメングリ＝ギレイをクリミヤの汗位から追おうとするであろう。それを、はたして無益な企てと笑殺しえるかどうか。カザンにおける汗家の兄弟の間での汗位交替劇に接したメングリ＝ギレイの目には、そこでのできごとは単なる隣国のお家騒動ではなく、もって銘すべき他山の石と映じたはずである。となれば、そこから導きだされる教訓も、モスクワとの同盟を解消すべきでないということ以外にありえない。モスクワにヌル＝デウレットという切り札を出させないため、自分の汗位をおびやかす最大のライバルの復帰を封じるためにもメングリ＝ギレイは、モスクワとの同盟を維持しなければならなかったのである。

五

以上、一五世紀後半のモスクワ国家とタタール世界との関係をカザン、クリミヤ両汗国とのつながりを中心に述べてきた。これについて、いかなるまとめをおこなうべきか。

時代の流れからすれば、一五世紀後半はロシアとタタールとの力関係が従来のタタールの優位から逆転へとむかう転換期であった。それは、より巨視的にはロシアが他の民族を征服、併合してユーラシアに巨大な多民族国家を築いていく過程のはじまりにあたっていた。わけても、カザンにかいらいの汗をすえたのは、モスクワのタタール世界への本格的な進出の端緒、東方への拡張にむけての第一歩とみなしうるであろう。

ただ、それにしてもである。同時にここでは、モスクワがタタール世界へ進出するにあたり自らの武力のみに頼るのではなく、相手の側の事情に多大の配慮を払ったという点にも注意を向けておきたい。モスクワがカザン汗位の候補としたカシム、ムハメッド＝エミン、アブドゥル＝ラーティフは、いずれもカザン汗国の始祖ウルー＝ムハメッドの男系子孫であり血統のうえでは申し分のない正統性、カザンの汗たるにふさわしい資格を備えていた。実際、カザン汗国の有力家門の間にもカシムらを汗として戴こうとする一派が存在したのであり、この一派の声をもってカザン人全体の意向を代表させるのにはもとより無理があるにしても、少なくともカシムらがカザンの事情を無視して一方的に押しつけられた支配者ではなかったのはたしかである。また、ムハメッド＝エミンとアブドゥル＝ラーティフについては生母を通じてクリミヤ汗家と姻戚関係にあり、モスクワとクリミヤとの同盟からしてもモスクワがカザン汗として推すにうってつけの人物であった。

こうした異民族世界の正統性原理の尊重、血縁、姻戚のネットワークへの周到な配慮は、一五世紀後半の対タタール関係に特有のものである。後代、ロシアが巨大帝国になると交渉の相手となった諸民族の側の正統性に対する細やかな心配りは消え失せ、圧倒的な軍事力にものをいわせての征服、併合、保護国化が常態となるであろう。

とはいえ、一五世紀後半のモスクワがタタールの側の事情に格別の注意を払ったのは、むろんそれなりの背景があってのことであり、それはこの期におよんでなおタタールがロシアにとって恐るべき相手であったためにほかならない。その事実を、わけても強くモスクワに思いしらせたのは一四四五年のスーズダリの戦いにおける敗北である。自身が捕虜となったモスクワ大公ヴァシーリー二世にとり、敗北の苦い思い出は消えるものではなかった。事実、彼はその後はタタールとの争いに自ら矢面に立つことを避け、おりからモスクワに仕えるようになったカザンの皇子カシムを活用するようになる。

また、スーズダリの戦い当時五才であったヴァシーリー二世の息子イヴァン（後の三世）の脳裏にも、敗北とそれにつづく父公の悲運は強烈なトラウマとなって残ったはずである。はたして、イヴァンは父のひそみにならい、否それに輪をかけてタタール皇子の政治的利用を推しすすめていく。カザンに対してはムハメッド＝エミンのみならずその弟アブドゥル＝ラーティフと二枚の駒をもってあたり、同盟者であったクリミヤに対してもヌル＝デウレットによってメングリ＝ギレイを牽制するというように過重なまでにタタール皇子に頼ったのである。

と考えてくると、三章でも触れた有名な「ウグラの対陣」におけるモスクワ軍の行動についてもあらたな角度から光をあてることが可能となるであろう。一四八〇年ウグラ河をはさんで向かいあった大オルダのアフマート汗とイヴァン三世はついに戦端を開かないままに終わった。一般にはこれはアフマートがあえて戦いに踏み切れず兵を引いたのであり、それゆえにこそ「タタールのくびき」の終えんを画する事件であったとうけとめられている。だが、不戦の原因についてはアフマートのみに帰せられるべきではなく、イヴァン三世の側の事情についても考慮しなければ片手落ちのそしりを免れない。そこで、この問題について考察をすすめるうえでの比較対照の材料として「ウグラの対陣」以前のロシア＝タタール間の対決の頂点の一つであったクリコヴォの戦いを想起してみるとしたい。

「ウグラの対陣」から時代を一世紀さかのぼった一三八〇年、ドン河のかなたのクリコヴォの野においてイヴァン三世の曾祖父にあたるドミートリーは、ママイの率いるタタール

の軍勢と戦い、うち破った、この史実を念頭におきながらウグラにおけるイヴァン三世の行動に思いをめぐらすと、彼の慎重さは不可解ですらある。時はちょうどクリコヴォの戦いから百年後、タタールを前にしたイヴァン三世は、何故、曾祖父の例にならおうとしなかったのか。

まず第一にあげるべき理由は、やはり一四四五年のスーズダリの戦いにおけるモスクワ軍の敗北であろう。もはや伝説と化した曾祖父のいさおしよりも、自身が幼年期に体験した父公の敗北と虜囚の生々しい思い出の方がイヴァン三世の行動を直接左右する動因となったとしても不思議ではない。

そしてさらに考慮をおよぼすべきがタタール軍の首領の性格の違いである。クリコヴォの野でドミートリーと向かいあったママイは、実はタタールの正統の君主ではなかった。キプチャク汗国の歴史においてはチンギス汗の血統を引かないでのしあがってきた実力者が何人かあらわれるがママイもそのうちの一人であった。これを破ったドミートリーは、はたしてその直後台頭してきたチンギス汗の血統者トフタムイシュによってモスクワを焼かれ、ふたたびタタールに屈服せざるをえなくなる。すなわちクリコヴォの勝利は、イスラムのタタールに対する勝利ではあっても、正統のタタール君主に対する勝利ではなかったのである。この点「タタールのくびき」のもとロシア人がチンギス汗の血を引く汗たちに抱きつづけてきた畏怖の念はクリコヴォで払拭されたわけではなく、むしろかえってタタール汗の底力をトフタムイシュによって思いしらされた感すらあった。そしてこの思いは、トフタムイシュの孫にあたるカザン汗ウルー＝ムハメッドにスーズダリで敗れるにおよびいっそう増幅されることとなる。

そこで話をウグラ河畔にもどすと、ここに軍をすすめてきたアフマートはママイと違い正統の汗、チンギス汗の男系血統者であった。これと正面きっての会戦には踏み切ろうとしなかったイヴァン三世のためらいの理由としては、チンギス汗の血に対する畏怖の念を無視するわけにはいかないのである。が、にもかかわらずである。イヴァンは、正統のタタール君主アフマートを前にしても屈服することなく、対峙をつづけ、ついにタタール勢を撤退させるにいたった。ここにこそ、「タタールのくびき」終えんの意義が求められるのである。

一五世紀後半のロシアにとっては、タタールの実力はいまだ侮りがたいものであった。モスクワは、タタールと事を構えるにあたり、相手側の事情についての周到な配慮を必要とし、それにしたがって自身の行動を律しなければならなかった。ウグラでのイヴァン三世の振る舞いは、そうした状況のなかでの一つのクライマックスであったとみなせるであろう。

注

① キプチャク汗国を継承したタタール諸国の特徴については、拙稿「ロシアとタタール世界――キプチャク汗国の継承諸国」(『宝塚造形芸術大学紀要』四)参照。

② ロシア人とタタール人の歴史的関係の問題については、山内昌之氏の近年の一連の業績、とりわけ『スルタンガリエフの夢――イスラム世界とロシア革命――』(東京大学出版会、一九八六年)、『ラディカル・ヒストリー――ロシア史とイスラム史のフロンティア――』(中央公論社、一九九一年)を参照。

③ C. J. Halperin, *Russia and the Golden Horde: The Mongol Impact on Medieval Russian History*, 1985.

④ スーズダリの戦いの経緯とこれがおりから生じていた大公位継承争いにおよぼした影響については、Gustave Alef, The Battle of Suzdal in 1445. An Episode in the Muscovite War of Succession, *Rulers and Nobles in Fifteenth-Century Muscovy*, 1983. 参照。

⑤ К. В. Базилевич. Внешняя политика Русского централизованного государства. вторая половина XVIв. М., 1952, с. 55.

⑥ 研究者のあいだにはカザン汗国の建国をウルー＝ムハメッドの時代ではなく、マフムーテクが支配者となった一四四五年のこととする見解もある (J. Pelenski, *Russia and Kazan: Conquest and Imperial Ideology* (*1438–1560s*). 1974, pp. 23–24)。

⑦ G. Vernadsky, *A History* of *Russia*, 1969, pp. 77–78.

⑧ К. В. Базилевич. Указ. соч., с.43.

⑨ Там же, с. 52-53.

⑩ カシムはその後まもなく一四六九年ごろ没し、息子のダニヤルがその跡を継いだ (А. А. Зимин. Россия на рубеже XV–XVI столетий., М., 1982, с. 235)。

⑪ К. В. Базилевич., Указ. соч., с. 53.

⑫ Там же, с. 63–64.

⑬ A. Fisher, *The Crimean Tatars*, 1978, pp. 8–11.

⑭ 五年戦争については、К. В. Базилевич. Указ. соч., с. 208–217. 参照。

⑮ В. В. Каргалов. На степной границе. Оборона ≪Крымской украины≫ Русского государства в первой половине XVI столетия. М., 1974, с. 25–26; К. В. Базилевич. Указ. соч., с. 282–337.

⑯ Robert M. Crosky. The Diplomatic Forms of Ivan III's Relationship with the Crimean Khan, *Slavic Review*, vol. 43, no.2, 1984, *Muscovite Diplomatic Practice in the Reign of Ivan III*, 1987.

⑰ К. В. Базилевич. Указ. соч., с. 201–202. これに対しジーンは、一四八四年の意征はなく、八五年にムハメッド＝エミンがモスクワの手でカザン汗位につけられ、これがまもなく（八五年末―八六年初）追われてアハマムが復位、さらに八六年春ムハメッド＝エミンの復位、アハマムの三度目の登位という説をとっている (А. А. Зимин. Указ. соч., с. 284)。

㊽ 一四八九年、ノガイからモスクワへの最初の使者を送ってきたノガイの有力者がムーサとヤムグルチェイである（Б.-А. Б. Кочекаев. Ногайско-русские отношения в XV-XVIIIвв. Алма-Ата, 1988, с. 67-68）。

㊾ К. В. Базилевич. Указ. соч., с. 186 ; А. А. Зимии. Указ. соч., с. 235.

㊿ К. В. Базилевич. Указ. соч., с. 187-188.

(51) Там же, с. 186.

（関西大学助教授）